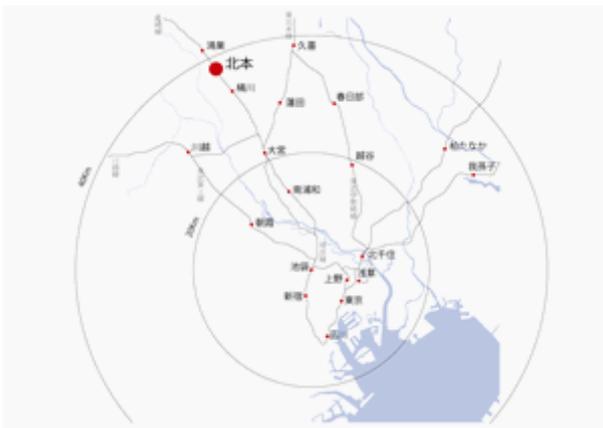


まちを作ること、人を育てること

◇ 北本市の概要

北本市は、上野からJR高崎線で45分ほどの場所にある、埼玉県中央部のまちです。昭和46年に県内33番目の市として誕生しました。市の中央部を国道17号やJR高崎線が縦断し、これに沿って市街地が形成されています。さらに、その外側には緑豊かな田園地帯が広がり、西側には荒川が流れています。武蔵野の雑木林を今なお残している、魅力ある豊かな自然のあるまちです。JR高崎線・北本駅は、市内の唯一の鉄道駅です。



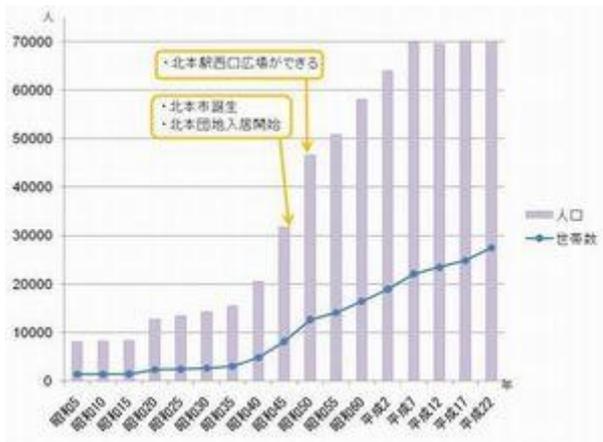
北本の位置(編集局作成)



JR 北本駅前の様子

昭和30年代には、1万人台の人口でしたが、昭和46年に北本団地の入居が始まり、郊外のベッドタウンとして発展してきました。現在では7万人を超える人口規模となっていますが、近年は人口も上げ止まりで横ばいの状態が続いており、高齢化も進んでいます。年代構成的にも退職した人の比率が高くなってきており、その中でどのようなコミュニティーを作っていくのかということが課題となっています。

典型的な郊外のベッドタウンとして発展してきた街が、これからの高齢化、人口減社会を見据えた時に、どのように手を打つべきなのかという、他の多くの街にも共通した問題を抱えているといえるでしょう。



北本市人口と世帯数の推移(編集局作成)



北本団地:昭和46年入居開始。総戸数2,097戸。北本駅からバス5分の立地。緑豊かな住環境が形成されている。

駅前広場の現状と改修計画の概要

編集局 添田昌志

現在の北本駅西口駅前広場は昭和 50 年に完成されたものである。当時、北本市の人口は増加が著しく、それに対応する交通インフラの整備として行われた。とは言え、当時の駅周辺は商店や住宅はなく、畑の中の広場という感じであったそうである。そこから 35 年あまりの時間が経ち、施設の老朽化やバリアフリーへの配慮、交通量の増加、中心市街地活性化などの課題に対応するために、現在改修計画が進められている。改修計画案では、雨でも濡れずに歩けるようなシェルターの設置、交通機能を整理した機能的なレイアウト、多目的広場や植栽帯の設置など、様々な試みが提案されている。



現在の西口駅前広場



完成予想イメージ



北本駅の構内にある広報ポスター

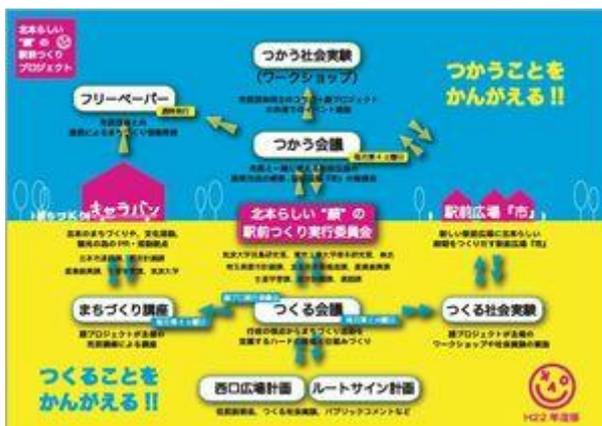


「北本まちづくりキャラバン」に置かれている模型

「北本らしい“顔”の駅前づくりプロジェクト」

この改修計画の最大の特徴は「北本らしい“顔”の駅前づくりプロジェクト」として、行政と住民、さらに大学が協働してワークショップなどを開き、改修計画の内容や改修された後の使い方を濃密に議論していることにある。一般的に駅前広場のような公共工事は、外部のコンサルタント会社が計画を作り、地元の協議会である意味形式的な審議をして承認されるというのが通例である。また、市民に対しては月刊の広報誌に掲載する程度という状況も多い。

それに対して今回の改修計画では、計画段階から積極的に住民参加を促し、そして整備後のソフト的な活用手法についても議論するなど、『つくる』だけでなく『つかう』ことまで視野に入れた計画づくりに取り組んでいる。具体的には、市民団体と共同して北本の特徴(顔)について考える「ワークショップ」、まちづくりに関係する専門家による「まちづくり講座」、市民が参加して駅前広場の活用方法について考える「つかう会議」などを平成20年度から定期的実施している。また、それらの企画、運営のために市に専属の職員を置いていることも特筆すべきことである。



「北本らしい“顔”の駅前づくりプロジェクト」組織図

大学への依頼と成果

上記のようなプロジェクトを推進する鍵となっているのが、筑波大学等の教員をはじめとする研究者や専門家の存在である。行政と住民がやりとりするためには、第3者的な立場で説明できる人材が必要ということで、これらの専門家はハードの整備に関する専門的な助言を行うというだけではなく、住民の視点に立って住民と会話ができる存在としての役割を担っている。

また、このプロジェクトには学生も多く参加している。上記のワークショップについては筑波大学貝島研究室と東京工業大学塚本研究室に所属している学生が中心となって調査などを行い、発表役を担っており、その結果を発信するブログも彼らを中心に運営されている(北本らしい“顔”の駅前づくりプロジェクト ブログ)。その他にも広報用のポスターを作ったり、イベント告知のチラシを配ったり、地域のお祭りに出かけて計画案の説明を行ったりと学生が担う役割は大きいようである。市の担当者によると、このような学生の参画は今回のプロジェクトには不可欠で、地元でまちづくりに関心ある同世代の若者たちとも連動し、うまく機能しているとのことである。また、住民の立場からすると、専門家の先生というよりも、学生という方がおそらくとっつきやすく、親近感を覚え、コミュニケーションをとりやすいというようなメリットもあるだろう。

以降では、筑波大学の貝島桃代氏に、このようなまちづくりに関わることになった経緯や、大学として参画する意味について伺います。

まちを作ること、人を育てること 貝島桃代氏インタビュー

貝島桃代氏プロフィール

1991年 日本女子大学家政学部住居学科卒業
1992年 塚本由晴氏とアトリエ・ワン設立
1994年 東京工業大学大学院修士課程修了
2000年 東京工業大学大学院博士課程修了
2000-09年 筑波大学講師
現在、筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授



インタビュー風景

— 北本駅西口駅前広場の改修計画では、貝島研究室が関わって住民参加のまちづくりを進められています。貝島さんは建築家として多くの作品を作られています。まちづくりには単体の建築作品とは違った労力や時間がかかると思います。そのような住民参加のまちづくりにも参加しようと思われた背景について教えてください。

◇ キャンパス・リニューアルという実践の場

私は筑波大学で、学生と一緒に「キャンパス・リニューアル」という学内の老朽化した建物や場所を改修するプロジェクトを10年ほどやってきました。そこでは、学内ではあるけれども、実際のまちづくりの場と同じような問題は起きる。教員、職員、学生など、立場の異なる人が環境改善のためにかかわるのですが、その協働のフレームをどうつくるかが重要です。キャンパスを学生たちのアイデアで改修しようと、大学執行部の考えでプロジェクトがはじまったとしても、大学も縦割り社会です。当初は組織を超えたプロジェクトや横断的な議論をする仕組みはなく、学生もプロではないので、学内の環境に対して提案することには時間もかかり、そのための体制作りが重要な課題でした。けれども回数を重ねることに、プロジェクトに対する認識の共有や、プロセスも整理され、予算が限られている中で、一生懸命提案する学生たちとの活動を、すごく楽しんでくれるようになり、結果として今では、プロジェクトはとてもしやすくなりました。学生のほうも、筑波大学の特徴として、学生が

大学の周りに住んでいることから、学校の環境は、自分の縄張りだという、意識がある。こういったことから、背景にあると思います。



キャンパス・リニューアルの事例写真

左:ホスピタブル・イン・ホスピタル・プロジェクト(筑波大学附属病院)

右:ウォーターフロントプロジェクト

◇ 人をそだてる土壌

その後「キャンパス・リニューアル」でやってきたことは、「アート&デザインプロデュース」という教育プログラムに展開しました。アートやデザインは一体どのように社会的に役立つのか、自分たちが自分たちのための表現をするのではなく、他の人たちのことをプロデュースする、つまり自分たちが脇役になるような、そういうやり方で何かできないかということです。そのために学生たちの3C力(コミュニケーション、コーディネーション、コラボレーションといった物事やそれに関わる人をプロデュースしていくのに重要な能力)を高めることを目的としています。

北本のまちづくりを受けた背景には、キャンパス・リニューアルの蓄積と経験や、研究室でも水戸や金沢など調査や建物の改修計画にかかわっており、こうしたことがあったと思います。

筑波大学 特色ある大学教育支援プログラム(教育 GP)『アート・デザイン教育による3C力の育成』
2009年度の活動報告
2010年度の活動状況

— 現在の北本を取り巻く状況として、ベッドタウンとしての機能が強かったこともあり、地域ネットワークが希薄になっていることや、高齢化などの課題が挙げられます。そのあたりの視点から、駅前広場の改修計画に込められている貝島さんの思いをお聞かせください。

◇ 社会構造の変化に対応する

高度成長する東京のベッドタウンとして、人口増加した北本には団塊の世代が多く住んでいます。あたり前ですが、彼らの価値観は高度成長期の社会を背景としています。昭和50年につくられた現在の西口広場も、こうした高度成長期を支えてきた交通広場です。東京時間の広場といえるでしょう。

けれども、35年後の現在、彼らは退職し、地域の高齢化率は高くなりました。駅前広場は東京に働く人を送り出すポンプとしての役割から、違った価値が求められているのではないのでしょうか。地域の誇りを奮い立たせ、愛着を感じ、人々が情報を交換しながら集える広場です。社会構造が変わってしまったときに、あるべき広場を考えようとしています。

◇ 世代を超えたつながりを持つように

こうしたなか、北本には、今まちに関わりたいと思っている若い人たちが集まってきています。東京で何かするよりは、地元で何かする。地域とつながることに関心を持っているのです。これは、新しい価値観ではないかと思います。

私達の世代は、団塊世代とこうした若者世代の間にある世代といえるでしょう。今、関心があるのは、こうした世代をうまくつなげられないかということです。団塊の世代の人達には楽しく、健康に老後を過ごしてほしい、若い人達には、彼らが感じている価値観をもとに色々なことに挑戦できる、寛容な社会になってほしいと思っています。

— 今回の改修計画では、具体的にはどのような取り組みをされてきたのでしょうか。

◇ 特に問題のない地域特性の中で

このプロジェクトの話があった時に、ひとまず話し合いの場をつくることから始めなくてはと思いました。そこで、初年度には、月に1回市民参加のワークショップをして、広場のアイデア出しをしました。未来の駅前を構想するテーマでは、子供達から、駅前が動物園だったらというようなアイデアも出たのですが、緑豊かな特徴から、雑木林といったようなアイデアも出ました。ワークショップと並行して、市の特徴を探して、色々な調査もしました。その中で対象としたものの一つに雑木林があります。北本市でも市内の雑木林を買って資産としてちゃんと残していこうという方針もありました。なので、こういうことをもっと意識的にできないだろうかというので、今残っている雑木林の株を移植することを提案しました。そして、ワークショップを始めてちょうど半年経ったころ、まちの顔となる植栽帯や、イベントや市など市民活動のパフォーマンスの場として多目的広場、車での送迎用の停車帯、などいろいろ盛り込んだ案を、1度まとめました。それを近隣の自治会長の方などが入った検討会議そしてパブリックコメントで意見を求め修正していきました。

こうしたまちづくりには、そこにはいろいろな人が参加してくれましたが、多いもので30～50名ほどで、7万の人口からすればわずかでした。

その理由を考えたとき、北本の豊かさにあるのかもしれないと思いました。埼玉は気候も厳しくありませんし、作物も取れる豊かなところで、中心市街地の空洞化、高齢化や人口減少など統計的におきているわずかながら起きていることは、まだ大きな、困るような問題になっていません。だから、

まちづくりでワークショップを企画しても、地元の方も関心も危機感を持ちにくい。よそ者が、ただ、ああだこうだ言っているという反応も多かったのではないかと思います。



ワークショップの様子

一 実際の活動を通して、貝島さんが感じたことや、今後の計画のあり方などお聞かせください。

◇ 時間を含んだ計画づくり

大学の研究室がまちづくりにかかわることは、いろいろな地域でなされていると思いますが、そのようなプロジェクトの枠組が、市役所にあるところは少ないのではないのでしょうか。市民参加についても同様で、市民サイドも、市役所サイドでも、そのノウハウやしくみも位置づいていないのが現状です。

だからそういった状況のなかで、それを一度に変えるような計画は受け入れられる枠組みがない。どうやら理解や了解には、時間がかかるということが、分かってきました。

こうしたやり取りから、提案は時代に合わせて使い方を変化させていけるような冗長性や寛容さをもったものを考えました。今から20年後のあるべき姿というのを描きつつ、それを現状も受け入れられるようにしておく計画です。ある機能でしか使えないというものではなくて、植栽帯や多目的広場や駐車場の変化を受け入れられるような空間を含み込んだ計画案です。空間があれば、それを時代にあわせて改修することもできる。そういった時間を含み込んだものといえるでしょう。

まちづくりの人材についても、持続性や時間の問題は大切です。現在北本には、地元の20代前半の若者が地元にかかわりたいという意識を持って集まってきている。これを一過性のものにするのではなく、こうした機運を深められるような組織や場所といった、枠組ができれば、持続的にかかわれるようになるのではないのでしょうか。

◇ 外からの評価をきっかけに

彼らは、北本をもっとポジティブにとらえて表現したいといいます。北本団地での共同的な生活スタイルや荒川土手にある開放感、雑木林であそぶことの豊かさなど、自分たちが愛着を感じていることがなにか表現にならないかと考えている。そして、外から北本にきた若いアーティストも、外部の視点としてそれをより強く感じるような意味のレベルにまで表現することを試みていて、これらが相ま

って、なにか、かわることがあるのかどうか、さまざまな形で取り組まれています。

市民のなかにも、地元に着着はあるのです。でもそれは、東京のような価値観がすばらしいと言われてきた人たちにとって、どうも表現しづらい。こうしたことの一つの例としては、以前、ある委員会で、雑木林の緑のすばらしさとその資源としての可能性について私がお話すると、「ださいたまだよ」とか、「そんな、本当に？」という反応がある一方で、納得もありました。彼らにとって、「好きだけど、なかなか自慢できない」。まちはそんな存在だったのだらうと思います。

けれども、東京の価値観に魅力を感じない若い人たちは、もっと素直に自分達のこの場所で何かできないかと思っている訳です。その辺がうまく結び付くといいなと思います。



北本の雑木林

一 公共空間の整備を検討する組織のあり方についてはどのようにお考えでしょうか。

◇ 持続的に考えられるような場に

ヨーロッパには美観委員会があります。現在手掛けているアムステルダムでのプロジェクトでは、美観委員会が、月に1回招集されて、委員として登録されている建築家が集められて、アムステルダムに建てられる建物をみんなでレビューしているのに、われわれも説明にいきました。アムステルダムで建物を建てるには、そこでの議論を経る必要があります。手続きも時間もかかりますが、面白いのは、そういった委員が必ずしも保守的でないことです。古い街区であれば、昔のものを残せばいいという単純なことではなく、新しいものをつくるのだから、その意味と態度をしっかりと示していくことが、建築家にもクライアントにも求められている。こうした議論をすることこそ、建築文化になっています。そういう意味では、日本でも建築を民主主義的につくる方法を、もう少し議論する必要があるのではないのでしょうか。日本で、ヨーロッパと同じ方法が適しているかはどうかはいえませんが、参考にはなるでしょう。美観委員会は、建主、建築家と住民と市役所の間に入る、ある種の中立機関としてとてもよく機能している。美観委員会で議論を尽くされたということに関しては、住民の方も納得できるし、専門家として信頼もしているので、「専門家でそこまで議論されたんだったら、受け入れよう」という判断になるんですね。

日本のまちづくりでは、重要な歴史家も含めた都市計画の専門的な知識をもつ人たちが集まって、議論を重ねる場はありません。今回も、検討委員会という組織がありましたが、専門家ではなく、市民の代表による会議です。

今回、具体的に広場を提案していますが、その研究を通して、本当の目標はまちについて考える

枠組をつくることです。「モノができて、何となく使えている」というのではなく、持続的にまちづくりに
ついて考え、議論できる場や組織をどうすればいいか、もう一步踏み込んで、みなで知恵をしばっ
ていきたいと思ひます。

資料提供:北本らしい“顔”の駅前つくりプロジェクト実行委員会

北本駅西口駅前プロジェクトを通してまちづくりを発見する

編集局 川上正倫

■市民の利益とは何かを考える

まちづくりにおける理想は、当たり前だが、市民の利益となる空間整備である。ところが、この「利益」の理解が非常に難しい。そこにどのような共通の目標を設定するためのアプローチこそがまちづくりの要だと考えている。今回の北本駅西口駅前広場の空間整備プロジェクトはまさしく、そのアプローチがユニークであり、それを構築するに至った経緯に非常に興味をもった。

今回その構築を主導している貝島さんに、北本駅前広場プロジェクトを中心にまちづくりへの関わり方を聞くことができた。まずは、貝島さん自身の、大学の研究者であるという立場、教員という学生を指導する立場、建築アトリエの主宰者としての設計者の立場、という3つの立場を様々な意味で柔軟に統合する熱意が一番印象に残った。3つの立場を使い分けるというより、3つの立場を併せ持つキメラ的な状況を最大限利用し、通常では得がたい専門家のコミュニティや学生のエネルギーの投入を可能としてプロジェクトを進行させる。研究者としての分析的視点による「観察」によって独自の「発見」につなげ、その「発見」をもとに建築家として提案的「定着」を図る。また、各立場においてプロジェクトを説明し、協力を仰ぎながらそれを統括するという点でも、建築家の立場が発揮されている。

もっともこう書くと、言葉の上ではプロジェクト遂行上の当然の行為に聞こえてしまいそうであるが、その柔軟さの表れとして、どのプロセスも全くルーティーン化していない点が挙げられる。それどころか膨大なエネルギーを注ぎ込むことによって、リサーチそのものをアート活動の域にまで引き上げていることがひとつの特徴である。教員として芸術系の学部に所属しているということも、リサーチをアート活動に結びつけるために、リサーチの下支えとなる行動力ある学生の確保に寄与しているだろう。それを牽引するだけの建築家としての作家性がうまく融合しているということであろう。北本に限らず、様々なプロジェクトが学生の実働的な参加という非常にアクティブな形で進められている。

■「現状」と「整備案」の戦い

さて、北本駅西口駅前広場のプロジェクトは、駅前という立地に加え、広場という用途によって極めて公共性の高いものになっている。市民からの様々な意見が出やすく、かつ総意を形成することは難しい。実際の成果も即効性が期待できるわけではない。また、どのようなプロジェクトにおいても、最大の敵は「現状」である。余程大きな問題でも抱えていない限り、愛着がある「現状」は、議論が進めば進む程、無くされる対象として判官鼻負される。

これまで開発というと、「日本の風景を支えてきた自然の野山をつぶして便利さと引き換えにかけがえのない環境を犠牲にする」というわかりやすい善悪構図に頼って煽り過ぎたせいか、「現状を

変えること」への抵抗が、公共プロジェクトにおける積極的提案を難しくする。公共プロジェクトにおいて、土木系のコンサルタント会社が行ってきた事業プロセスは、まさしくそのような抵抗に対する理論的説明を最適化してきたものとも言える。しかし、市民を合理的に納得させることに主眼を置いたが故に、結果として整備された空間は「画一化」されやすかった。

北本のプロジェクトでは、大学によるリサーチと市民ワークショップ、建築家主導のデザイン、ということによって「現状」に対する発見をし、この「画一化」を打破することが目的である。ある時から何故か敬遠されていたその街にオリジナルな空間を考えることによって、公共性を獲得しようとしているのが北本市としてのまちづくりへの挑戦である。その為には、そもそもまちづくりや広場にオリジナルリティが必要なのか、という議論から始めなければならないだろう。しかし、そのような議論は、必然性のあるまちづくりや広場が発見されるきっかけとなるだろう。

■市民と議論をすること

議論を通して相互の理解を深めていく必要があるわけだが、市民は議論や問題点の発見には慣れていない。この理解がなかなか難しく、時間がかかる。以前、アムステルダムにおける再開発事例をヒアリングした際も似たような話を聞いた。再開発に際して、何が望ましいかを市民に問うと、極めて個人的な要望しか挙がらない。それを根気よく議論することで、個人の利益と公共の利益の違いについて、時間をかけて理解することができるようになったという話であった。元々オランダ人が論理的な議論が好きな国民性ということもあるかもしれないが、それを通して建築家も市民の要望を理解でき、市民も建築家が敵ではなく、市民の代理人として専門的な検討を行っている立場なのだということが理解できるようになる、ということが印象的であった。貝島さんが強調していたまちづくりを考える市民を育てる重要性と共通する。

北本では、市民に開放された議論の場が用意されている。「つくる会議」と「つかう会議」の2つの性格の会議が併行して開催されているということもユニークである。特に「つかう会議」は、今後も持続的に開催するべき、広場の使い方を考える大事な場であると思う。何らかのイベントを企画するにせよ、実際につかう人自体が育たないと成立しなくなる。

インタビューでも述べられているように、時間の経過による退化がない、持続可能な仕組みを残していく事が大事であるという意見には賛成である。ボランティアベースの運営では限界があり、市民の日常に新しい広場がきちんと「利益」として根付く必要がある。その「利益」を持続させるための努力が当然課せられる。学生が去り、建築家が去った後に何が残るのか。市民は視野を広くして自分たちのまち全体を見渡す必要がある。行政、建築家、市民がそれぞれ各自の立場から、まちづくりにおける発見が必要なのである。目先の利益を追いかけると大きな利益を逃す事にもなってしまう。たかが広場といえどもまちの顔としてまちの行く末を決める大事なまちづくりなのである。